

患者ファースト

向井 秀樹

重症な尋常性乾癬や関節症性乾癬、アトピー性皮膚炎(AD)、そして特発性慢性蕁麻疹に著しい効果を上げている生物学的製剤(バイオ)が、大学や市中病院の日常診療現場を席卷している。尋常性乾癬患者のPASI 95~100が夢ではなくなっており、関節症性乾癬の難治性の関節症状をも大幅に改善し、QOLの向上につながっている。ADのバイオは発売わずか2年で13,460例という驚異的な勢いで使用例を伸ばしている。EASIスコア16以上ないし顔面に広範囲に強い炎症を伴う例に使用でき、EASIスコアを75~90クリアする症例が続いている。定期的な注射だけでステロイド総使用量は激減し、保湿外用薬主体の夢の時代が到来している。重症慢性蕁麻疹は抗アレルギー薬の併用や増量にほとんど反応せず、ステロイドやシクロスポリン内服を余儀なくされてきた。バイオを3回、ときにそれ以上注射すれば90%の症例は大幅に改善する。その後は重症度が下がり、抗アレルギー薬の単独でコントロールできる。疾患の根源を制御できるバイオの登場で、大学や市中病院の診療内容は大幅に変貌を遂げている。

今後、ADや蕁麻疹の診療ガイドラインでも重症例の第1選択薬としての位置づけが確立されると思う。さらに、新しい薬剤の開発や発売が進行しており、将来的にはこれらのバイオを使い分けることで、長年苦しめられてきた重症患者にとっては明るい未来が保障される。患者の通院頻度、通院時間、自己注射の可否そして患者の年収などを加味して、患者の重症度に相応しい適切かつ十分な治療法を患者ファーストという形で提供できる時代が訪れようとしている。

患者ファーストという抵抗を感じる先生方もおられるかも知れないが、現在の医療は昭和の時代までの医師主導型とはいえない。健康番組が映像で流れ、出演している俳優や歌手、芸人などが直接患者になり、彼らの健康状態を詳細に検討して映像をみる一般の人々の医療に関する話題や関心を高めている。ラジオ、週刊誌や健康雑誌においても、特集号が放送・掲載され、現在は医療問題が大衆化しているといっても過言ではない。診療現場でも勉強熱心な患者さんは多く、診療時にいくつも質問をしてくれる。現在や新しい治療法や手術などに関して、患者サイドに十分説明し最終的な決定権を患者サイドに委ねることが多い。患者ファーストな診察姿勢といえる。

近い将来、診察前にAIによる問診や疾患ごとのわかりやすい病態や治療の流れなどを聞き、薬剤への効果を知るために遺伝子検査を実施して、極めて高い有用性と安全性や費用対効果を担保した適切な薬剤の選択が可能になる時代が来ると思う。それこそが、真の意味で患者ファーストの治療といえるのかもしれない。